

表とが合意したジュネーブ宣言は、旧ハプスブルク帝国内の南スラヴ人諸地域とセルビアとの対等な合体を想定していた。この宣言に沿って国家が形成されていれば、南スラヴ人の統一国家は少なくとも過渡的には「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」とセルビア王国との連合国家になり、シュトロスマイエルシナリオが実現していたことになっただろう。しかし、このジュネーブ宣言は、数日後にパシッチがセルビア政府と摂政アレクサンダルの同意を得られないことを理由に合意を撤回し、反故にされてしまった。

このあと、統一国家形成の主導権は国内の政治指導者に移った。国民評議会の支配的なグループは、イタリアによる侵略の進行や国内の治安の悪化を理由にセルビアとの国家統合を急いだ。その結果、彼らは、わずか二日の議論でセルビアとの国家統合を決めた。彼らはセルビア政府の要人や議会のメンバーがまだ全員帰国していないのに統合交渉に出発した。ユーゴスラヴィア委員会に報告を求めることもなく、十分な情勢把握や交渉戦術の協議もせずに、彼らはベオグラード行きの特等列車を見切り発車させたのである。予期されたとおり、セルビア議会のメンバーの大半はまだ帰国していなかったため、本格的な交渉は先送りにされた。プリビーチェヴィッチが主導権を握っていたザグレブ国民評議会の代表団は、次期セルビア国王のアレクサンダルやセルビア政府首脳の意向に沿って、国家統合のセレモニーを先行して行うことに同意した。その際、出発前に行われた国民評議会総会の決議である「基本方針」は、新国家の政体を王制にするか共和制にするかは立憲議会が決定するとしていたが、代表団のメンバーは、この「基本方針」に反して、新国家をセルビアの王朝のもとに置くことに同意した。彼らは事実上、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」がセルビア王国に無条件に統合されることに合意したのである。

12月1日の宣言によって「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」は消滅した。わずか一ヶ月の歴史であった。同時にクロアチアは

歴史的なアイデンティティを失うことになった。ハプスブルク帝国内の南スラヴ人ブロックから生まれた国家がこのように短命に終わるとはシュトロスマイエルには想像がつかないことであっただろう。「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」は人口の上でも領土の上でもセルビア王国の二倍であったから、これをセルビアが統合することは小が大を呑み込むに等しい行為であった。大戦間期の東欧史研究で名高いジョセフ・ロスチャイルドは、この間の南スラヴ人政治指導者の行動を、「ハプスブルク帝国が崩壊するなかで、イタリアによる侵略と社会革命に対する恐怖から、帝国内の南スラヴ人政治エリートはパニック状態に陥り、セルビアの軍隊・王朝・官僚のもとに保護と救援を求めてなだれをうって飛び込んでいった」⁷²と叙述している。たしかに、国民評議会中央委員会での委員の発言をみると、ステェパン・ラディッチのような反対論者やアンテ・パヴェリッチなどの慎重論者を除けば、そのような状況が政治指導者の間に支配的であったことは否定できない。

以上の国家統合の過程を振り返って、国民評議会の側からみて指摘できる問題点の第一は、新国家の体制についてセルビア政府側と十分に協議を行わず、無条件で国家統合を既成事実にしてしまったことである。国民評議会が侃々諤々の議論を経てまとめた統合交渉の「基本方針」はまったく活用されなかったといつてよい。たしかに、彼らは交渉をすればセルビア側に比べて弱い立場になっただろう。とくに軍事力の弱さは致命的な弱点であった。しかし、取引の材料がまったくないわけではなかった。たとえば、クロアチアには旧オーストリア＝ハンガリー帝国陸軍の残存部隊があり、帝国海軍はクロアチア人とスロヴェニア人の将兵が掌握していた。これらの軍隊はたしかに弱体化していたがまだ侮れない力が残っており、国民評議会の独自の軍隊として再編強化する道もあったはずである。ところが、国民評議会の代表団のメンバーはこのような資産をセルビアとの統合の交渉の場で取引の材料に活かすこともなかった⁷³。むしろ、国民評議会の指導部は旧帝国軍隊の力を過小に評価し、セルビアとの国家統合にあ

たつては軍部の意向をないがしろにした。彼らは、治安や安全保障の面でセルビア軍への依存関係を強め、以下に述べるように、最後には自らの手で旧帝国軍隊を解体してしまったのである。

第二に、セルビアとの国家統合にあたって、国民評議会の指導者が一般民衆に支持を呼びかけたりすることがなかったことである。もっとも、これは当時の状況を振り返ればやむを得ないことかもしれない。国民評議会の指導者にとって、一般民衆は自分たちの味方や協力者であるというよりも、脱走兵の集団（「緑の部隊」）とともに国内の治安を乱す敵対者と映っていたからである。しかし、そもそも、南スラヴ人の統一国家構想は主として知識人によって抱かれていた考え方であり、民衆の支持に根付いた思想とはいえなかった。ましてセルビアとの国家統合はクロアチアの民衆にとっては思いもよらないことであった。セルビアとの国家統合は旧ハプスブルク帝国の政治エリートだけによって決定された。この政治エリートは戦前の制限選挙によって選出された議会の議員が中心であった。彼らは知識人や中産階級の考えを代表していても、人口の大半を占める民衆、とくに農民の民意を反映する代表ではなかった。

農民の利害代表であるクロアチア農民大衆党は二年後に実施された普通総選挙では50議席を獲得したが、このときはクロアチア議会に3議席しか保有しない少数野党にすぎなかった。その党首ステェパン・ラディッチは、セルビアおよびモンテネグロとの国家統合は連邦制の原則によって行うべきであると主張し、新しい国家におけるクロアチアの地位を事前に確定することに最後まで執着したが、彼の考えは政治指導者の間ではまったくの少数意見にとどまった。いずれにせよ、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」は広範な国民世論の後押しによって成立した国家ではなかったため、民衆の政治的表出が始まるとたちまち大きな遠心力が作用し、この国は内部的にまとまりと安定性に欠くことになった。

新国家の前途が多難であることを告げるかのごとく、建国宣言の4日後には流血の衝突がクロアチアで起こった。12月1日の「セルビア人、クロ

アチア人、スロヴェニア人の王国」の建国宣言は翌2日に首都ザグレブに報道され、セルビアとの国家統合を支持する人びとは街頭に繰り出して喜びをあらわにした。ザグレブの市内は翌日も祝賀ムードに包まれ、新国家の樹立に狂喜した人びと、とくにダルマチアからの若者は大いにはしゃいだ。しかし、これを快く思わない人びとも当然いた。ザグレブ駐留の旧帝国陸軍第53歩兵連隊ならびに旧祖国防衛隊第25歩兵連隊に所属する将校と兵士がそうであった。彼らは、南スラヴ人地域のオーストリア＝ハンガリー帝国軍の駐留部隊がそうであるように、10月29日の「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の独立宣言後には国民評議会の指揮命令に服する部隊になっていた。

国民評議会の指導部は、オーストリア＝ハンガリーからの独立を宣言するときには、その武力を恐れて旧帝国軍の指揮官に対して慎重に意見を打診し、その支持を取り付けていた⁷⁴。ところが、ベオグラードでセルビアとの国家統合を実行するときには、国民評議会の指導部は、事前に旧帝国軍の指導部に対して説明をしていなかったし、意見を求めることもなかった。ないがしろにされた軍部のメンバーには不満が募っていた。12月5日、150人前後の将校と兵士は武装して隊列を組み、兵舎から市内中心部に向けて示威的な行進をおこなった。彼らは行進中、「共和国万歳」、「クロアチア共和国万歳」、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の共和国万歳」、「ステパン・ラディッチ万歳」「ペータル国王はいらない」などと口々に叫び、セルビアとの国家統合を了承しない態度を示した。彼らは中心市街で待ち受けていた国民評議会に忠誠を誓う民兵の部隊と衝突し、銃撃戦にエスカレートした⁷⁵。

死者13人、負傷者17人を出したこの事件によって国家統合に対する祝賀ムードは一気に冷え込んだ。ベオグラードにいるプリビーチェヴィッチに代わって国民評議会政府を預かっていた「クロアチア人・セルビア人連合」のセルビア人グループはただちに反対勢力の粛清を開始した。旧帝国陸軍のザグレブ駐留部隊は武装解除を命じられ、首謀者の将校は軍事裁判

にかけられ、その他の兵士は自宅に退去処分となった。一方、国民評議会
は軍事担当の行政部署を廃止した。これ以降、国民評議会の管轄する地域
の軍事と防衛を引き受けたのはザグレブ駐留のセルビア軍であり、セルビ
ア軍は国民評議会に代わって、旧オーストリア＝ハンガリー帝国の残存部
隊を指揮命令下に置いた。これによってセルビアは軍隊の中央集権的な統
合を成し遂げた。さらに国民評議会指導部は、セルビアとの国家統合に反
対していた真正権利党とクロアチア農民大衆党の機関誌は一時発行を禁止
し、真正権利党の幹部二人の身柄を拘束した⁷⁶。

12月5日に起こった流血の惨事は、新国家の内部的なまとまりがいかに
脆弱であるかを発足時から示すこととなった。もともと、新しい統一国家
は建国が宣言されたものの、その体制は立憲君主制をとるほかはまだ何も
決まっていなかった。セルビア側のねらいは、中央集権的な単一国家にす
ることであり、これには旧ハプスブルク帝国内のセルビア人も同じ考えで
あった。これに対して、クロアチア人とスロヴェニア人は連邦制の採用な
いしは広範な自治権が与えられることを期待していた。彼らの念頭にあっ
たモデルはハプスブルク帝国がとっていたオーストリアとハンガリーとの
国家連合であり、新国家においてもそのような内部構造が採用されること
を期待したのである。国家統合を決めた政治指導者の間でも思惑の違いが
表面化し、同床異夢が崩壊するのは時間の問題であった。

注

- 1 以上の点についてより詳しくは、材木和雄「南スラヴ人統一国家構想の起源と展開
—1917年『コルフ宣言』に至る過程—」、『広島平和科学』25号、2003年を参照。本稿
はその続編にあたる。
- 2 クリソルド（田中一夫他訳）『ユーゴスラヴィア史』、175ページ。
- 3 ただし、バルカン諸国全体の通史書として定評のある木戸翁『バルカン現代史』（山
川出版社1977年）には、「一〇月二八日にスラヴ人地域での敗北を認めたオーストリア
＝ハンガリー軍当局は、権力をこの民族評議会に移譲し、翌二九日、クロアチア議
会は『ダルマチア、クロアチア、スラヴォニアはフィウメとともにハンガリーおよ
びオーストリアから完全に独立した国家であり、……スロヴェニア人、クロアチ

ア人、セルビア人の共通の民族主権国家に参加する』との決議を採択し、一〇月三日にはスロヴェニア議会、一一月一日にはボスニア議会が同じ趣旨の決議を行った」と書かれている(同書、183ページ)。

ユーゴスラヴィアの国外で出版された通史書もおおむねこの程度の記述であり、たとえば、John R. Lampe, *Yugoslavia as History: Twice there was a country*, Cambridge University Press, Cambridge, 1996 はザグレブに臨時政府として国民評議会が成立したことを述べるが、この政府が「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」を代表する機関であることにはふれられていない。

- 4 フランツ＝ヨーゼフの死後、オーストリア皇帝に即位したカール1世は、1917年3月、皇后の実兄で義理の兄にあたるブルボン・パルマ家のゾイクトウス公に書簡を送り、イギリスとフランスに接近した。この書簡はフランス大統領ポアンカレに届けられた。その中でカール1世は、講和のための取引として、ドイツ領アルザス・ロレーヌ地方に対するフランスの正当な返還要求を支持する旨を表明した。ポアンカレは、「フランスの敵はドイツのみである」との言質を与え、イギリスにもカール1世の講和への望みが伝えられた。
- 5 オーストリア＝ハンガリーとの単独講和の締結に対しては、イタリアが強硬な反対姿勢で臨み、連合国の足並みはそろわなかった。イタリアは、南チロルやトリエステ、ダルマチア地方など1915年のロンドン条約で約束された「未回収の領土」をオーストリア＝ハンガリーが割譲しない限り、単独講和には応じられないとしたが、これはオーストリア＝ハンガリーにとっては受け入れがたい条件であった。
- 6 イタリアとオーストリア＝ハンガリーとの戦争は、東部国境のイゾンツォ川に沿っての攻防とヴィチエンチア北方のアジャージョ高原をめぐる攻防とが二大戦場となり、両軍とも一進一退を繰り返していた。1917年秋に、ドイツは6個師団をロシアからイタリア戦線に移動させ、10月24日オーストリア＝ハンガリー軍とともに、カポレット付近のイタリア軍を総攻撃した。イタリアの前線はすべて崩壊し、イタリア軍は浮足立って退却した。イタリア軍の被害は甚大であり、一説によると死傷者10万人、捕虜となった者30万人、脱走者40万人といわれる。
- 7 イタリア軍と対峙するオーストリア＝ハンガリー軍には多数の南スラヴ人兵士が含まれていた。カポレットの戦いでも中央同盟軍の勝利の突破口を開いたのはボスニア＝ヘルツェゴヴィナから派遣された部隊であった。彼らはイタリアが南スラヴ人の土地を狙っていることに憤慨し、祖国を守るため勇猛果敢に戦ったので、イタリア軍も手を焼いていた。
- 8 ユーゴスラヴィア委員会についてより詳細には、前掲の拙稿を参照。
- 9 イギリスが強く支持し、フランス政府も代表を送ったこの大会にはトルムピッチも参加し、その直前にトーレと結んだ合意事項を確認した。ただし、主催地のイタリア政府はこの大会に代表を派遣しなかった。イタリア政府が反ハプスブルク勢力を支援したのは、オーストリア＝ハンガリーを内部から弱体化させることが理由であった。それゆえ、イタリアの態度の変化はあくまでも戦術的なものであり、オーストリア＝ハンガリーの解体と南スラヴ人国家建国を支持する方向に転換したわけではなかった。英仏露の各国政府が、イタリアの参戦に対する見返りとして南チロルやトリエス

テ、イストラ半島などイタリアにとっての「未回収の領土」の取得を約束したロンドン条約（1915年4月）は、オーストリア＝ハンガリーの存続を前提としていたからである。

- 10 事件の発端は、1918年4月2日、オーストリア外相のツェルニーンがかつな発言をしたことにあった。ツェルニーンは、ウィーンの州議会で政治講演をおこなったが、このときフランス政府の要請によってウィーン政府は単独講和の交渉をおこなっていたことをもらし、フランスとの講和に関してはアルザス・ロレーヌ地方の返還要求を除いて障害はないなどと述べた。ツェルニーンは国内向けに戦局について強気の発言をしてみせたのであったが、これを伝え聞いて怒ったフランス首相クレマンソーは、カール皇帝がフランス大統領に宛てた書簡を公開し、講和交渉は実際にはカール皇帝からの要請であったことを明らかにした（Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, August Cesarec Zagreb, Zagreb, 1990, p.36）。なおクレマンソー（1841－1929）は議論で暴力をふるうとまで呼ばれるほど弁舌が鋭く、フランス政界では「虎」というあだ名を付けられて恐れられていた人物であった。したがって、オーストリア外相のツェルニーンの発言は「虎の尾を踏む」行為となったのである。

すでに述べたように、カール皇帝は、講和のための取引として、ドイツ領アルザス・ロレーヌ地方に対するフランスの返還要求を支持する旨を書簡の中で表明していた。このことが宮廷内の主戦派と同盟国のドイツに発覚し、カール皇帝は立場がなくなった。皇帝は外相のツェルニーンを罷免したが、これぐらいのことで事態が收拾する問題ではなかった。

- 11 1918年5月12日、カール皇帝はドイツ軍総司令部に赴き、オーストリア＝ハンガリーとドイツとの政治・経済・軍事同盟を強化することを謳った協定文書に自ら署名した。このことでカール皇帝は、ドイツ側の疑いの目を払拭しようとしたが、それは連合国との単独講和の道を最終的に断つ行為に等しかった。
- 12 1917年11月に政権を獲得したレーニンらのボリシェヴィキは、「平和に関する布告」を発表し、「無併合・無償金・民族自決」の原則に基づく交渉による講話を呼びかけていた。
- 13 同時期に連合国はポーランド人に対しても独立国家の再興を確約した。
- 14 クロアチアは地理的には4つの地域に分かれる。ザグレブを中心とする狭義のクロアチア、東部の農業地帯スラヴォニア、アドリア海沿岸とその後背地を含むダルマチア、およびアドリア海北部の小半島部イストラである。このうち、クロアチア、スラヴォニア、ダルマチアの三地域は、中世以来のクロアチア王国固有の領土であるとクロアチア人はみなしている。これは正式には「クロアチア・スラヴォニア・ダルマチア三位一体王国」と呼ばれる。ハプスブルク帝国は征服戦争によってではなく、近隣諸国の王族と婚姻関係を結んだり、封建領主層と封建的な契約関係を結んだりすることによって領地を拡大してきた。クロアチアに対しても王国としての地位を認め、その国王にはオーストリア皇帝が就任する一方で、クロアチア総督府（バン）と議会（サボル）を中心機構として地元の支配層に一定の自治権を認めてきた。クロアチア人は、これを中世のクロアチア王国以来の権利（国権）であると考えていた。

ところが、広義のクロアチアの諸地域のうち、クロアチアとスラヴォニアはクロア

チア総督府の支配下にあったが、ダルマチアとイストラはオーストリアの支配のもとにあった。さらに1867年、ハプスブルク帝国がオーストリア＝ハンガリー二重帝国に再編されたとき、クロアチアとスラヴォニアはハンガリーに併合された。1868年にハンガリー政府はクロアチア議会と協定を結び、クロアチアに内政上の自治権を認めたが、その自治権は不十分なものであり、ハンガリーはクロアチア支配の実権を留保していた。したがって、クロアチア王国は実質的にはオーストリアとハンガリーによって分割支配され、クロアチアの国権はきわめて限定されていた。

このため、19世紀の後半以降、クロアチアの諸政党の一致した目標は「クロアチア三位一体王国」の失われた権利を回復させることとなった。その実現の方策をめぐっては三つの考え方が出現した。一つの案はハプスブルク帝国の三重王国化構想である。これは、オーストリアやハンガリーと同等の地位をクロアチアに与えることを求める案である。もう一つは、帝国内のスロヴェニア人やセルビア人の居住地域を含めて南スラヴ人の全地域を単位として、帝国の連邦化をめざす案である。これは「南スラヴ統一主義」と呼ばれ、ユーゴスラヴィア建国の源流となった考えである。

以上の二つはハプスブルク帝国の枠組みの中にクロアチア人あるいは南スラヴ人の自治単位を形成しようとする構想であるが、帝国の外にクロアチア人の独立国家の建国をめざす案もあった。これは権利党の創設者であり、クロアチア人ナショナリズムの父と呼ばれるアンテ・スタルチェヴィッチが提起した構想である。彼の考えの基礎になったのは「権利主義」という思想である。この考えによれば、クロアチアがハプスブルク帝国に帰属するようになったのは封建的な契約関係によるものであるから、クロアチア人はこの契約関係を破棄し、独立国家を復興させる権利を有する。さらに、スタルチェヴィッチはクロアチア人をカトリックのセルビア人とみなすカラジッチのセルビア主義に反発して、民族としてセルビア人が存在することを否定し、クロアチア人以外には歴史のあるいは民族的な正当性を認めない極端なクロアチア主義を主張した。

独立国家案は当時の政治条件の下では非現実的な構想であったが、スタルチェヴィッチの考え方はクロアチア人の民族感情に訴え、徐々に浸透を始めた。ところが、1871年にスタルチェヴィッチの盟友エウゲン・クヴァルテルニクは、単独でクロアチアの解放をめざして武装蜂起をおこなった。この反乱はただちに鎮圧されたが、これによって権利党は活動を大きく制限され、1878年まで政治活動を許されなかった。その後、再建された権利党の主張は穏健化し、スタルチェヴィッチとその支持者たちは現状に譲歩して、最終的には三重王国案を受け入れることになった。

ここで第一次世界大戦末期にしぼって、クロアチアの政治勢力の動向を概説し、彼らの間で南スラヴ統一主義が有力な考え方になっていく過程をみておきたい。クロアチアの政治の中心機構である議会（サボル）には様々な政党が議席をもっていたが、議席数をみると、クロアチア人の民族政党とセルビア人の民族政党の統一会派である「クロアチア人・セルビア人連合」が過半数を占めていた（48議席）。次いで、スタルチェヴィッチ権利党が14議席、真正権利党（ヨシフ・フランクを指導者としたのでフランコヴツィと呼ばれた）が9議席、クロアチア大衆農民党が3議席、マジャローニと呼ばれたハンガリー政府に盲従するグループが12議席であった。したがって、議会

を支配していたのは「クロアチア人・セルビア人連合」であったが、政治的なイニシアチブを発揮していたのはスタルチェヴィッチ権利党であった。これらの諸政党は、クロアチアとハプスブルク帝国内の南スラヴ人諸地域の将来について、見解を異にしていた。

スタルチェヴィッチ権利党は真正権利党から分かれた政党であり、基本的にはハプスブルク帝国の枠内でクロアチア問題の解決をめざすが、条件次第では帝国の外部に南スラヴ人国家の建国する構想をも視野に入れており、この点でウィーンに盲従する態度をとる真正権利党と政見を異にしていた。彼らはまた、真正権利党とは異なって、クロアチアにおけるセルビア人の民族的存在を認め、クロアチア人とセルビア人の共同行動を政治活動の基本においていた。これに同調したのは、「クロアチア人・セルビア人連合」の反主流派（スルジャン・ブディサヴレヴィッチ他）であった。1917年5月、オーストリア＝ハンガリー二重帝国のうち、オーストリアが支配する地域の代表によって構成される帝国議会の南スラヴ人代議員はユーゴスラヴィア・クラブを結成し、帝国の枠内に南スラヴ人の統合国家を要求する声明（「五月宣言」）を出したが、スタルチェヴィッチ権利党はこれを熱烈に支持した。

ステファン・ラディッチが率いるクロアチア大衆農民党は、スタルチェヴィッチ権利党とは一線を画し、議会では真正権利党に同調していた。ラディッチらは当初、オーストリア・スラヴ主義の立場に立ち、ハプスブルク帝国を連邦制の国家に再編し、クロアチアを中心とする南スラヴ人の国家単位を形成するという「ドナウ連邦」を構想していた。スヴェトザール・プリビーチェヴィッチが指導する「クロアチア人・セルビア人連合」は議会の最大勢力であり、ハンガリー政府と協力関係を結び政権を担当していたが、大戦中には日和見主義的な政策に終始し、現存の二重帝国の維持を考えていた。

第一次世界大戦中は敵対する陣営に分かれて活動していたこともあって、クロアチア国内の政治家とユーゴスラヴィア委員会との関係はきわめて弱く、情報のやりとりも直接的にはなかった。ニュースや伝言は中立国のスイスを経由して伝えられた。1917年8月、スイスに滞在していたザグレブ大学神学部教授のフラン・バラツは、セルビア政府との協議を終えたばかりのトルムビッチと会談した。トルムビッチはコルフ島での会議の様子を伝え、クロアチア国内の政治家は「五月宣言」から「コルフ宣言」に支持を変えるべきであることを述べた。つまり、ハプスブルク帝国の枠組みから離れてセルビアと合同国家を作るということである。バラツは帰国後、スタルチェヴィッチ権利党の指導部にトルムビッチとの会談内容を伝えた。その結果、セルビアとの合同国家構想は1つのオプションとみなされるようになった。

他方、スタルチェヴィッチ権利党は、ユーゴスラヴィア・クラブとその議長であるアントン・コロシェッツと密接な関係を確立した。親交を深めたクロアチアとスロヴェニアの政治家は、ハプスブルク帝国からの独立を視野に入れていた。1918年1月にアメリカ大統領ウィルソンが14カ条の講和条件を発表し、オーストリア＝ハンガリー内諸民族の自治的發展を1つの条件としたことは彼らの接近を大いに促進した。1918年2月、スタルチェヴィッチ権利党（アンテ・パヴェリッチ党首）とスロヴェニア人民党（アントン・コロシェッツ党首）は、ハプスブルク帝国内の南スラヴ人諸地域の政

党・政治集団の会議を開くことで合意した。この会議は1918年3月2日と3日にザグレブで開かれた。会議には、スタルチェヴィチ権利党、「クロアチア人・セルビア人連合」の異端分子、クロアチア＝スラヴォニア社会民主党の代表、スロヴェニア人民党、スロヴェニア人民急進党、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナのクロアチア人とセルビア人政党の代表、ダルマチア、イストラ、メジウムーリエの政治グループの代表が参加した。

会議では二つの見解が議論の焦点となった。南スラヴ人国家の建設という点では一致していたが、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の統一国家はハブスブルク帝国の枠外に建設しなければならないという意見と、連合国の勝利が確定していない以上、「五月宣言」に提示された帝国の枠組みの中での解決策（ハブスブルク帝国の連邦化）もまだ放棄すべきではないという意見が出された。しかし、最後には共同声明を出すことで一致した。それは、人民の統一と独立の立場に立つすべての政治勢力を結集することの必要性を強調し、人民の独立と民主的基礎で形成されたスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家を要求した。ただし、この声明はハブスブルク家の王権や帝国の枠組み、将来の国家の領土について言及していなかった。セルビアおよびモンテネグロとの合同国家の形成についても言及されていなかった。戦争はまだ続いており、ハブスブルク帝国の枠組みに反対する者は弾圧される可能性があったからである。しかし、帝国の枠組みに言及しないことは、会議の参加者の考え方がコルフ宣言の構想に接近していることを意味していた。これとは別に採択された非公表の内部決議は、独立で自由な南スラヴ人国家を要求するものであった。

ステパン・ラディッチ率いるクロアチア大衆農民党は、このザグレブ会議には参加しなかった。しかし、ラディッチは、1918年4月、アンテ・パヴェリッチおよびアントン・コロシュツとともにプラハで開催されたスラヴ人の政治集会に出席し、そこで大きな政治路線の転向を表明した。すなわち、反セルビア人・反南スラヴ統一主義を基本方針とする真正権利党と手を切り、オーストリア・スラヴ主義を捨てて、クロアチア問題の解決策として、南スラヴ人国家樹立の構想を受け入れ、ザグレブ会議で盛り上がった「諸民族結集」の運動に参加することを表明した。

クロアチア議会の最大勢力である「クロアチア人・セルビア人連合」もザグレブ会議に参加しなかった。彼らは諸民族結集の運動の枠外に身を置いていた。スタルチェヴィチ権利党は5月に開かれた議会（サボル）で「クロアチア人・セルビア人連合」の日和見主義の方針を攻撃した。しかし、その真意は連合を諸民族結集の運動に参加させることであった。というのは、最大勢力である「クロアチア人・セルビア人連合」の参加なしには運動を成功させる見込みがなかったからである。

1918年7月、イワン・ロルコヴィッチとジューロ・シュルミンが「クロアチア人・セルビア人連合」を離党し、南スラヴ人国家の建設をめざす諸民族結集の運動に合流することを表明した。二人は連合内部のクロアチア人グループ（クロアチア進歩党）の指導者であり、現行の体制の支持を固執する連合のセルビア人指導者スヴェトザール・プリビーチェヴィッチとの路線対立が離党の原因であった。プリビーチェヴィッチが諸民族結集の運動に参加しなかったのは、新しく樹立される南スラヴ人国家のもとでセルビア人の既得権が維持できるかが不確かであり、それゆえ、ぎりぎりまで二

重帝国の体制を支持することで権力を維持しようと考えたからであった。

しかし、プリビーチェヴィッチと「クロアチア人・セルビア人連合」はその後も日和見主義の立場を続けた。10月5日、クロアチアおよびスロヴェニアの諸政党の代表は、帝国内の南スラヴ人解放運動のナショナルセンターとして「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国民評議会」を創設したが、このときも「クロアチア人・セルビア人連合」は参加を見送った。彼らが国民評議会メンバーの説得に応じて参加を決めたのは、オーストリア＝ハンガリーの解体が決定的になった1918年10月8日のことであった。

以上は主として、Dušan Bilandžić, *Hrvatska Moderna Povijest*, Golden Marketing, Zagreb, 1999, pp.47-52, Hrvoje Matković, *Suvremena politička povijest Hrvatke*, Ministarstvo unutarnjih poslova Republike Hrvatke, 1995, pp.53-55 による。

- 15 以下の経過については、主として、Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, pp.63-102, Matković, *Suvremena politička povijest Hrvatke*, pp.52-62による。
- 16 カール皇帝の「諸民族に対する布告」には、南スラヴ人には承服しがたい一節が含まれていて、せつかくの提案の趣旨を台無しにした。それは「この再編はハンガリーの聖なる王冠に属する諸国の領土保全をけつして侵すものではない」という語句であり、これはクロアチアとスラヴォニアに対するハンガリーの支配権をこれまで通り承認することを意味していた。この点について、イギリスの歴史学者のA・J・P・テイラーは、「このいよいよ最後のときでさえ、ハプスブルクは、マジヤール人の脅迫に屈していたのである」と述べている(A. J. P. Taylor, *The Habsburg Monarchy 1809-1918, A History of the Austrian Empire and Austria-Hungary*, Penguin Books, London, 1948, p.248)。オーストリア＝ハンガリーは対外的にはドイツの支援で維持されていたが、対内的にはハンガリーが主導権を握っていた。敗戦が明白になった最後のときにおいてさえ、ハンガリーの支配層は、ハンガリー領土の歴史的国境とそこでの自分たちの支配的地位とを維持しようと欲し、皇帝に圧力をかけていたのである。
- 17 Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.88.
- 18 *Ibid.*, p.92.
- 19 10月28日にチェコスロヴァキア共和国が独立を宣言し、10月30日にはスロヴァキア人もスロヴァキア国民評議会を開き、ハンガリーから分離し、チェコ人と合体して単一国家を形成することを宣言した。ウィーンでは、10月30日に暫定憲法が臨時国民議会において採択され、社会民主党のカール＝レンナーが首相に任命されて、正式にドイツ系オーストリア国家の独立を宣言した。11月1日にはハンガリーがオーストリアとの国家連合を破棄して独立を宣言した。11月3日にポーランドも独立宣言した。同日、オーストリア＝ハンガリー軍はイタリアおよび連合国と休戦した。一方、カール皇帝は10月28日、ウィルソンの提案を受け入れて、帝国内の諸民族に完全な自決権を与えることに同意した。皇帝は独立した諸国家がハプスブルク王朝の権威を承認することを期待したが、諸民族は王朝を完全に拒絶した。皇帝は11月11日にオーストリアに対する支配権を、13日にはハンガリーに対する支配権を放棄した。カール皇帝は11月12日にウィーンを去って、スイスに亡命した。これによって650年にわたるハプスブルク王家の歴史は終わりを告げた。

- 20 セルビア首相のパシッチの主張によれば、南スラヴ人を代表する権利をもつのはセルビアだけであった。イタリアにとっても、ユーゴスラヴィア委員会がめざす南スラヴ人統一国家の建国は東アドリア海沿岸部の領有計画を挫折させる恐れがある。それゆえ、両国はユーゴスラヴィア委員会を連合国に認知させない点で利害が一致したのである。
- 21 この時期、イギリス人とフランス人の有志は、ユーゴスラヴィア委員会を連合国に承認させるため、再度強力な働きかけを連合国政府関係者におこなっていた。イギリスとフランスがユーゴスラヴィア委員会の承認に傾いたのは彼らの尽力によるところが大きい。ウィッカム・スティードはイタリア首相を説得して、トルムビッチを協議のためにパリに呼ぶことを同意させた。以上、Stephen Gazi, *A History of Croatia*, Barnes & Noble Books, New York, 1993, p.266.
- 22 パシッチは外相を兼務していた。
- 23 さらにフランス首相のクレマンソーは、連合国列強の協議の場でユーゴスラヴィア委員会にチェコスロヴァキア人やポーランド人の国外組織に認めたのと同等の地位を認める提案をした。
- 24 Gazi, *A History of Croatia*, p.267.
- 25 そもそもトルムビッチらユーゴスラヴィア委員会の中心メンバーはダルマチア出身の政治家であり、ザグレブの政界とは直接の交流がなかった。
- 26 Bogdan Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, Školska Knjiga, Zagreb, 1977, pp.164-167.
- 27 セルビアの野党は、ユーゴスラヴィア委員会の代表を閣僚に加えた挙国一致内閣の形成をパシッチに要求した。しかし、ユーゴスラヴィア委員会はセルビア政府が委員会の地位を承認することを第一に求めることを野党代表に伝えた。セルビア政府に入閣することに同意してしまえば、南スラヴ人の代表権の問題を放棄することになってしまうからである。パシッチは、野党がユーゴスラヴィア委員会との連携をやめ、ユーゴスラヴィア委員会の承認を国際世論に訴えたりしないことを条件に連立政府の形成を認めるという提案をした。これに対して野党は態度を硬化させた。以上、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, August Cesarec Zagreb, Zagreb, 1990, p.378による。
- 28 Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, p.167.
- 29 短時間の会見ではあったが、このときパシッチはコロシエツツの一行に自らの腹案を披露した。それは、第一にセルビアが対外的には全南スラヴ人を代表する、第二にザグレブの国民評議会は外交政策に関する委員会に代表を指名する、この委員会はセルビア政府外務省下の諮問機関となり、講和会議の資料を準備するというものであった。しかし、コロシエツツはパシッチのいうことがすぐには理解できなかった (*Ibid.*, p.168)。
- 30 会議の参加者は、セルビア側は、政府代表のパシッチに3人の野党代表(ミロラド・ドラシュコヴィッチ、ヴォヤ・マリニコヴィッチ、マルコ・トリフコヴィッチ)が加わり、国民評議会側は、3人の代表団のメンバー(アントン・コロシエツツ、メルコ・チングリア、グレゴール・ジェラフ)にトルムビッチと4人のユーゴスラヴィ

ア委員会のメンバー（グレゴリン、ワシリエヴィッチ、ストヤノヴィッチ、パニヤニン）が加わった。

31 パシッチはまず、ユーゴスラヴィア委員会メンバーの退席を要求した。アンテ・パヴェリッチの回顧録によると、パシッチの言い分はこうであった。「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の成立によってユーゴスラヴィア委員会の任務は終わったのだから、彼らは会議に参加する必要も資格もない。セルビア政府は国民評議会の代表団とのみ問題を協議したい。これに対して国民評議会の代表団団長のコロシェツはこう述べた。国民評議会幹部会は、すでにユーゴスラヴィア委員会を国民評議会に属する政府機関として公式に承認しており、この会議でも国民評議会代表団のメンバーとして出席する資格がある。コロシェツの反論によってパシッチは提案を撤回し、トルムビッチらユーゴスラヴィア委員会の5人のメンバーは会議に最後まで同席した（*Mrvoje Matković, Suvremena politička povijest Hrvatske*, p.66）。

32 11月6日の夜、トルムビッチは二つの重要な知らせをロンドンとパリから受け取った。一つは、イギリス政府の声明を伝えるシートン＝ワトソンからの電報である。これはジュネーブ駐在のイギリス公使がトルムビッチのホテルに持参した。それによると、イギリス首相のロイド＝ジョージと外相のバルフォアはこう述べた。イギリス政府は南スラヴ人の統合国家構想を後押ししたいと考えているが、そのためにはすべての南スラヴ人が共同行動をとり、統一戦線を結成することを希望する。このことについては、フランス首相のクレマンソーとイタリア首相のオーランドも同意見である。さらにシートン＝ワトソンからの電報はこう伝えた。ロイド＝ジョージ首相は、具体的な提案としてセルビア政府とザグレブの国民評議会が合同政府を形成することを挙げ、そうすれば連合国はこの政府をただちに承認し、ちょうどチェコスロヴァキアと同じように、新しい国家の代表が将来の講和会議に参加することが可能になる。

もう一つは、パリのウィリアム・スティードからの電報である。これはフランスの新聞社のジュネーブ支局長が持参した。11月5日にオーストリア＝ハンガリーと連合国との休戦協定は発効したが、その直後にイタリア軍がオーストリア＝ハンガリーの領土内に進駐を開始した。イタリアの意図は、ロンドン条約で約束された領土の占領であった。イタリア軍はプーラ港でザグレブの国民評議会の命令に従う意思を示した二隻の艦船を敵艦として撃沈した。イタリア軍の行動はただちに連合国サイドで問題として取り上げられ、スティードの電報は、フランスのクレマンソー首相がイタリア首相にこの件で強く抗議したことを伝えるものであった。スティードの電報はこう結んでいた。「事態は急速な進展が予想されるので、今もっとも重要なのはセルビア政府とザグレブの国民評議会が一刻も早く協議を終え、セルビアと南スラヴ人の国家との協定を内外に示すことだ」。トルムビッチは翌日の会議の席上この電報を参加者に披露し、これを受けてコロシェツはセルビア政府が国民評議会を承認し、統一国家に関する共同声明を出すことをパシッチに迫った。以上は、*Krizman, Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, p.170による。

33 同時にザグレブの国民評議会を合法政府と連合国が認め、セルビア軍に合流して戦闘行為に参加している南スラヴ人の志願兵団を連合国の交戦力として認めるよう連合国の各国政府に求めることにもパシッチは同意した。

34 ジュネーブ会議は二つの合意文書を残した。一つは南スラヴ人統一国家の創設にセルビア政府とザグレブの国民評議会とが合意したことを告げる「ジュネーブ宣言」であり、もう一つは会議で両者が合意した細部の事項に関する会議の議事録である。ここでは両者を総称して「ジュネーブ協定」と呼ぶことにする。ジュネーブ会議の議事録と「ジュネーブ宣言」の全文は Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, pp.109-113、「ジュネーブ宣言」の英訳が Stephen Gazi, *A History of Croatia*, p. 268-269, Snežana Trifunovska, *Yugoslavia Through Documents From its creation to its dissolution*, Martinus Nijhoff Publishers, Dordrecht, 1994, pp.149-150に収録されている。

このうちジュネーブ会議の議事録を以下に紹介する (Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, pp.109-111)。

ジュネーブ会議議事録

参加者

1. セルビア王国を代表して、ニコラ・パシッチ首相兼外相
2. セルビア国民議会の議員集団代表、ドラシュコヴィッチ、マリニコヴィッチ、トリフコヴィッチ
3. ザグレブの国民評議会代表、コロシェツ議長、メルコ・チングリア、ジェラフ
4. ロンドンのユーゴスラヴィア委員会代表、アンテ・トルムビッチ議長、グレゴリン、ワシリエヴィッチ (11月6日と7日)、ニコラ・スタヤノヴィッチ (11月7日午後、8日、9日)、パニャニン (11月9日)

すべての参加者が加わった討論では次の問題が審議された。

- I ザグレブの国民評議会が旧オーストリア＝ハンガリー帝国のスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の全地域を統治する合法的政府であることを承認する。
- II 合同国家の共通政府の形成。
- III イタリア軍が我々の領土を占領していることに対する抗議。
- IV モンテネグロに対する態度。

I

セルビア王国は国民評議会を (旧オーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人全地域を統治する) 代表であり政府であると認める、それは1918年11月3日に国民評議会が出した決議の意味においてであると結論づけられた。この承認はただちに実行される。すなわち、セルビア王国の首相兼外相パシッチは、ザグレブ国民評議会議長のコロシェツならびにイギリス、フランス、イタリア、アメリカ合衆国にこの承認を通知する。

全市民を有権者とし、直接・秘密投票による普通・平等選挙を通して選出される、セルビア人、スロヴェニア人、クロアチア人の統一立憲議会が憲法を採択し、国家機構を最終的に決定するまでは、セルビア王国とザグレブ国民評議会は、それぞれの内部の法律にしたがい、それぞれの領土的な範囲の上で、これまで通りの方法により、引き続き行政を行う。将来制定される憲法は、あらゆる国家生活の基礎であり、あらゆる権力と法律の源泉となる。これにしたがって、民主主義的な精神に乗っ取り、全国家生活が方向付けられる。

隣接する諸国家との国境は、民族の権利とあらゆる民族の自決権の原則に基づいて線引きされる。自分たちの権利に対するわが諸民族の断固とした確信と信念は、全世界の世論が適用され、我々の同盟国も公言している公正な原則によって保証される。

この決議の第1項の意味において、国民評議会が有効な承認を得られるように会議のメンバーは全力を挙げて努力することを誓う。

II

ザグレブ国民評議会に属する諸地域とセルビア王国を統治する共通政府を創設する。その任務は合同国家を組織することである。この国家に対しては立憲議会が憲法を制定する。

この目的のため、セルビア王国とザグレブ国民評議会は、それぞれの行政制度を変更することなく、以下の事項をセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の共通政府の所管事項とする。

1. 全外交政策およびその実施機関、講和会議の準備、情報宣伝活動。
2. 軍事。これは、国家の領土の保全ならびに和平交渉に関係した軍事活動をさす。それぞれの地域の治安維持は、当該地域の政府の所管とする。当該地域の軍事活動の司令部の所管も同様である。
3. 戦艦部隊の管理。
4. 海事行政、海洋交易、海洋衛生の管理。
5. 立憲議会の準備、暫定的な国家運営が将来の共通憲法に基づく通常の状態になるまでの経過期間に適用される政策。

セルビア王国とザグレブ国民評議会の両政府は必要に応じて協議し、その他の事項も共通政府の所管とすることができる。

さらに当該地域の政府の所管事項であっても、国家的な調整と統一が必要な事項については共通政府の所管事項とする。それらは次の事項である。

6. 鉄道、河川往來の汽船、郵便・電報のような交通・通信手段。国内の交通・通信事情を円滑にし、国民および国家の喫緊の必要性を満たすためである。
7. 都市生活者に対する食糧供給、戦争によって打撃を受けた国民経済の再建。
8. 捕虜、貧民、戦争寡婦、傷病軍人、障害者、避難民、国外追放者、投獄者、移民の帰還事業と生活保護。
9. 共通財務。これには、共通政府の財政、国内に流通する様々な通貨と金融制度の調整が含まれる。

共通政府は、その内部組織を定め、業務を分担し、業務上の細則を定めることができる。

以上の業務ならびに日常的な業務を共通政府はその権限の範囲内で自律的に遂行する。共通政府はセルビア王国政府およびザグレブ国民評議会との関係のもとに成立する。

これまで両政府が行政を行うための機関であったが、これからは共通政府の所管に移る機関はただちに共通政府に移管する。この秩序はセルビア王国政府と国民評議会政府と相互協定によってのみ変更が可能であり、立憲議会が全国家を対象に憲法を制定し、これに基づいて新しい国家組織が形成されたときには効力を喪失する。

将来はさておき、さしあたっては、共通政府の閣僚の半数は、セルビア王国政府が指名し、もう半数はザグレブ国民評議会が指名する。閣僚の数はさしあたり12とする。ここですぐに決めるのは6閣僚のみとし、残りの6閣僚はセルビア王国政府および国民評議会の決議を経てからとする。

共通政府閣僚として任命されるのは、セルビア王国政府の側では、リュバ・ドラシュコヴィッチ、ミカ・ガヴリロヴィッチ、ドラジャ・パヴロヴィッチ、国民評議会の側では、ヤンコ・ブレイツ、メルコ・チングリア、ドウシャン・ワシリエヴィッチである。

セルビア王国から指名された閣僚はセルビアの憲法に宣誓し、ザグレブ国民評議会によって指名された閣僚はザグレブ国民評議会で議長コロシェッツに対して宣誓を行う。共通政府の形成に関しては宣言文を作り、新聞に公表する。

III

(イタリア軍による我々の領土の占領に対して)正式に抗議を行うこととする。この抗議は、イギリス、フランス、イタリア、アメリカ合衆国の各政府に対して国民評議会の側から通知し、そのあと新聞に公表する。セルビア政府外務省は同様の抗議を行う。

IV

モンテネグロに対する関係については次のような立場に立つことを決定する。

1. モンテネグロ国民は南スラヴ人合同国家 (SHS) の構成要素である。
2. 我々は、合同国家にはモンテネグロ国家も参加することを構想している。すなわち、立憲議会では、モンテネグロを含めて南スラヴ人合同国家の全領域に施行される憲法が採択される。
3. モンテネグロを我々の合同国家の組織に参加させるため交渉を行うことを我々は希望する。またそれは同時にモンテネグロの全国民の代表との交渉となることを希望する。

コロシェッツ、チングリア、ジェラフは、1918年11月8日に、モンテネグロ政府閣僚のヴォヴィッチと会談した。ヴォヴィッチはモンテネグロ王国を正式に代表する立場で会談し、統合交渉はおよそ14日以内にパリで開催することができると答えた。この交渉はそのときまでに任命された共通政府の閣僚が担当することを決定する。

ジュネーブ、1918年11月9日

セルビア政府首相兼外相ニコラ・パシッチ

ザグレブ国民評議会議長アントン・コロシェッツ

ユーゴスラヴィア委員会代表アンテ・トルムビッチ

議会の諸グループを代表して協議に参加した者：マルコ・トリフコヴィッチ (セルビア議会議員)、M・ドラシュコヴィッチ (セルビア議会議員)、マリニコヴィッチ (セルビア議会議員)、チングリア (ザグレブ国民評議会)、グレゴール・ジェラフ (記者)。

- 35 合同政府は12人の閣僚から構成されることになった。パシッチは合同政府の首相と外相の地位を欲した。しかし、トルムビッチは反対し、最後には政党、国民評議会、ユーゴスラヴィア委員会の議長は合同政府に入らないことが申し合わされた。ジュ

- ネーブではすでに閣僚の人選もなされた。入閣するのは、セルビア王国側からは、リュバ・ダヴィドヴィッチ、ミラン・ガヴリロヴィッチ、ドラジャ・パヴロヴィッチ、国民評議会側からはヤンコ・ブレイツ、メルコ・チングリア、ドゥシヤン・ワシリェヴィッチである。残りの6人はあとで埋めることになった (Matković, *Suvremena politička povijest Hrvatske*, p.64)。
- 36 セルビア急進党のナンバー・ツーであり、コルフ島でセルビア政府を預かっていたストヤン・プロチッチはジュネーブ宣言の内容を知って驚愕し、パシッチへの電報の中でこう述べている。「ジュネーブ宣言は、南スラヴ人の解放に対するセルビアの貢献を否認するものである。・・・旧オーストリア＝ハンガリーの我々の同胞は、連合国が血の犠牲を払うことによって物的に解放されたが、精神的にはまだ解放されていない。彼らはまだオーストリア＝ハンガリーのイデオロギーの中に生きている」 (Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, p.175)。
- 37 このときプロチッチはパシッチにこう語った。「我々にとってトルムビッチらは交渉の相手ではない。(「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」が出現したからには) ユーゴスラヴィア委員会は独立のファクターではない。我々は十分に確信を得ているのは、ザグレブには、保守的でスタルチェヴィッチのイデオロギーに染まったトルムビッチとは異なった考えをするグループがいることである」 (*ibid.*, p.175)。
- 38 パシッチは、ジュネーブ宣言に署名をしたものの、最初からこの協定を反故することを考えていた。パシッチは、ジュネーブ宣言の署名をした11月9日、コルフ島のプロチッチにジュネーブでの合意内容をただちに伝えたが、その際にセルビア国王の摂政を務めるアレクサンダルがこの合意内容に対して拒否権をもつことを遠回しに述べて、ジュネーブ協定をセルビア政府とアレクサンダルが拒絶するように示唆していた。Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, Cornell University Press, 1984, p.134.
- 39 パシッチは、コルフ島のセルビア政府がジュネーブ宣言を裁可しなかったことを、摂政アレクサンダルがこれに反対していることを意味するとして、ジュネーブ宣言を撤回する理由にしたが、それは事実と反していた。ジュネーブ会議の合意文書がベオグラードのアレクサンダルのもとへ送られたのは11月21日のことであった。それゆえ、アレクサンダルはそれ以前には合意文書の内容を知りようがなかった。このことは11月22日に発覚し、野党に迫及される大問題になった。パシッチはアレクサンダルの名をかたったことにより、アレクサンダルの不興を買い、統一国家の形成後に組閣された最初の内閣では閣僚のポストをはずされた。しかも、彼が長年務めてきた外相のポストには宿敵のトルムビッチが就任する結果になった。以上、Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, p.382.
- 40 辞令を受け取ったトルムビッチが連合国政府に休戦交渉への参加を要請したのは、休戦協定が成立した11月2日のことであった (Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, p.166)。
- 41 *Ibid.*, p.266. なおこれを知ったトルムビッチはただちにセルビア政府に抗議したが、後の祭りであった (Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, p.379)。

- 42 しかも、イタリア軍は、プーラ港において国民評議会の命令に従う意思を示した二隻の艦船を敵艦として撃沈した。
- 43 Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, p.139.
- 44 *Ibid.*, p.139.
- 45 代表団のメンバーとして選ばれたのは、ラーザ・ボボヴィッチ、ワレリヤン・プリビーチェヴィッチ、ドラグチン・ペルコの3人である。前二者は民間のセルビア人、ペルコはクロアチア人の将校であった。このうち、ワレリヤン・プリビーチェヴィッチは、「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者スヴェトザール・プリビーチェヴィッチの実兄であった。彼はこのあと国民評議会の公使としてベオグラードにとどまった。
- 46 Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, p.190.
- 47 シモヴィッチはその後空軍参謀長の地位にまで登り詰め、ドイツ軍侵攻直前の1941年3月にはクーデターにより、ユーゴスラヴィア首相に就任した。
- 48 Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, p.190.
- 49 *Ibid.*, p.190.
- 50 *Ibid.*, p.191.
- 51 *Ibid.*, p.191.
- 52 *Ibid.*, p.191
- 53 ザグレブに到着した翌日の11月14日、シモヴィッチはセルビア軍総司令部に次のように報告している。クロアチアの全セルビア人はセルビアの王朝を支持している。ダルマチアの全クロアチア人、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの大半のクロアチア人、プリモーリエのほとんどのクロアチア人、およびクロアチアの若い知識人層も同様にセルビア王朝支持の見方をとっている。スロヴェニア人も、聖職者層を除くと、セルビア王朝を支持している。以上の人びとは、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家の過半数を構成する。共和制を支持する者は、権利党フランク派グループ、ラディッチのクロアチア大衆農民党、イワン・ロルコヴィッチ、および雑誌『模範』に集まる人びとである。スタルチェヴィッチ権利党は二つに分かれている。片方の一派はセルビア人に近い考えをもっているが、別の一派は連邦主義的な南スラヴ人国家を要求している。現在ザグレブでは南スラヴ人の連帯を求める考えが支配的であるが、これに慎重なグループもある。それにザグレブの外には農民および不確かな要素が存在する。国民評議会の軍隊（200人から300人程度の二部隊）は不安定な存在であり、治安の維持に役立っているのはセルビア人の元戦争捕虜によって構成された部隊である。国民評議会の多数派は、カラジョルジェヴィッチ王朝のもとで不可分の単一国家を形成する考えをもっている。スヴェトザール・プリビーチェヴィッチはパシッチとユーゴスラヴィア委員会が結んだジュネーブ協定について新しい情報を求めている。プリビーチェヴィッチはこう述べる。統一の政府をできるだけ早く形成する必要がある。しかし、統合の意思を表明した国民評議会の覚書に対して、セルビア政府はまだ返事を伝えていない。早急な回答が必要である。というのはその回答は今後の国民評議会の行動の基礎になるからである (*ibid.*, p.194)。
- 54 スタルチェヴィッチ権利党の指導者バヴェリッチは、歯科医が本職で、人柄も政治

手法もプリビーチェヴィッチとは好対照の人物であった。

55 かつての軍政国境地帯にあったバーニャ地区のコンスタイニツアに生まれた。

56 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, p.382.

57 主な出席者は、パヴェリッチ、ラディッチ、コーラッチ、クラマーといったクロアチア人とスロヴェニア人であり、プリビーチェヴィッチの名はなかった。Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, p.203.

58 この日の会議には以下のような提案が各グループから提出された (Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, pp.121-123、による)。

ダルマチア政府の提案

「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の国民評議会とセルビア王国およびモンテネグロの代表は、次の条件の下に統合を決定する。

1. a) 国家の政体 (君主制か共和制か) と国家の基本法、b) 国家の名称、c) 国旗、d) 国家の首都は来るべき立憲議会が決定権をもつ。2. 立憲議会が召集されるまで、国家評議会が立法権を行使する。この国家評議会は、a) ザグレブの国民評議会の全メンバー、b) セルビアの国民議会が選出する50人のセルビア王国の代表、c) モンテネグロの議会が選出する5人の代表、d) ロンドンのユーゴスラヴィア委員会が選出する5人の代表から構成される。3. 立憲議会が決定するまで国家元首の地位はセルビアの王位継承者アレクサンダルが遂行する。彼は議院内閣制の原則に従って国家評議会のメンバーから政府閣僚を任命する。4. 国家評議会は最初の会議で暫定的な国旗と軍旗を決める。なおこの旗が国際的に承認されるまで、セルビア王国の旗も併用する。5. 政府と国家評議会の所在地はサラエヴォとし、ここで立憲議会も開催される。6. 政府は、国内の平和と秩序が回復すればただちに選挙を実施し、議会を召集する義務を負う。立憲議会の選挙の仕方は国家評議会が定める。7. 政府は次のメンバーから構成される。首相、外務相、内務相、陸軍相、海軍相、社会福祉相、教育相、厚生相、食糧経済相、交通相、閣議の決定に投票権をもつ5人ないし7人の補佐官 (5人の場合は、セルビア、クロアチアおよびスラヴォニア、ダルマチア、ボスニアおよびヘルツェゴヴィナ、スロヴェニアの代表から構成され、7人の場合はさらにモンテネグロ、ヴォイヴォディナの代表が加わる)。8. この補佐官は、ベオグラード、ザグレブ、リュブリャーナ、サラエヴォ、スプリット、さらに場合によってはツェティナおよびノヴィ・サドの各地に置かれる地方政府と中央政府との間の仲介者となる。地方政府の首長 (ザグレブの場合、バン＝総督) は摂政アレクサンダルが任命する。既存の行政機構と組織は暫定的に維持され、既存の法令に沿って地方行政を行う。地方政府の活動は国家評議会と中央政府に責任を負い、国家評議会と中央政府は地方政府の活動を監督する。9. 外交、軍事、財政の業務は中央政府の専権事項とする。

エドモンド・ルキニッチ他3名の提案

1. 全南スラヴ人の居住地域、すなわち旧オーストリア＝ハンガリーの諸地域、セルビア王国、およびモンテネグロの完全な統合を宣言する。2. この統合を実行し、立憲議会が国家制度について最終決定を下すために、セルビア王国、モンテネグロ、および

国民評議会の代表は統一政府を速やかに形成する。3. 統合交渉の細部は、コルフ協定とダルマチア政府の提案に基づいて決定する。4. 統一政府が成立次第、国民評議会は中央委員会を招集して合意事項の批准を發議すること。

ブディスラヴ・アンジェリノヴィッチ他8名の提案

国民評議会は、共通の事項を処理するため、暫定的に統一政府を形成し、全国民共通の立法機関を設立する。その際の原則は、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の完全な対等同権である。国民評議会は、全国民の一部を代表する機関として、統一政府の形成に関わる。したがって、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の対等同権の原則に沿って、国民会議は代表団を選び、統一政府の形成をめざしてセルビア人代表団と速やかに交渉に入る。交渉はあらゆる場面で多数決による押し付けを排して行う。代表団は、この交渉結果が成立次第、国民評議会総会にその批准を發議する。

ステェパン・ラディッチの提案

民族学的には共通の系譜に属するが、歴史的、文化的、政治的な発展の面では三つの民族に分かれたスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人は、国民間および民族間の同権と団結を基礎に、その全居住地域を管轄する共通の合同政府を樹立する。その暫定的な構成は次の通りである。1. 統一合同政府の元首の権力は、セルビアの王位継承者、クロアチアの総督、スロヴェニアの国民評議会議長の三者から構成される摂政団が共同で遂行する。2. 摂政団は共通の合同政府を任命する。この合同政府は、外相、食糧相、防衛相の三閣僚から構成される。3. この合同政府は、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国民ないし最高評議会に責任を負う。この評議会には、セルビア国民議会、クロアチア議会(サボル)、スロヴェニア国民議会が各10名、ボスニア議会在が4名、モンテネグロおよびダルマチア議会在が各2名、ヴォイヴォディナとイストラが2名の代表を派遣する。4. 合同政府の管轄外となる全業務は、スロヴェニア、クロアチア、セルビアおよびモンテネグロの国家的な権利をもつ自治政府、ならびにボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ダルマチア、ヴォイヴォディナの地方政府が執行する。5. 上述の国家的な政府および地方政府は、それぞれの議会在に責任を負う。言い換えると、スロヴェニア政府はスロヴェニア国民議会在に、クロアチア政府はクロアチア議会在(サボル)に、セルビア政府はセルビア国民議会在に、ボスニア政府はボスニア議会在に、ダルマチア政府はダルマチア議会在に、ヴォイヴォディナ政府はヴォイヴォディナ議会在に責任を負う。

アンテ・トレスッチ-バヴィチッチの提案

国民評議会は、コルフ宣言を批准し、採択する。国民評議会幹部会はただちにベオグラードに出発し、セルビア政府と協力して、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の全領土を統治する統一政府を樹立する。統一政府は、立憲議会在が選んだ政府と交代するまで、すべての行政を執行する。

社会民主党の提案

我々は、内外の政治情勢が、統一的な暫定議会、統一的な最高権力と合同政府を求めていることを認める。しかし、我々は、共和制の政体を原則的に支持する者として、立憲議会が最終決定を下すまでは、たとえ暫定的にせよ、いかなる形においても君主制の条項を最高権力機関が裁可することには賛成できない。最高機関は暫定的に三人の元首団を承認するべきである。この三人はスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家評議会が選出する。国家の形態を決定できるのは立憲議会だけであり、この議会はあらゆる国民諸階層および政治潮流の願いを正当かつ完全に表現するものでなければならぬという立場に立って、我々は次の事項を要求する。統一国家の全領域において、どのような政治的、経済的、社会的な原則をもつ政党および個人に対しても、政治活動の自由が完全に保障されること、立憲議会の選挙は、普通・平等・直接・秘密投票の原則で、少数民族の権利を保護しつつ、満20歳以上の全男女を投票権者として実施されること。以上の点を留保条件として、我々は、ダルマチア地方政府が提出した提案を議論のたたき台とすることを受け入れる。

59 主要な議論を紹介すると、「クロアチア人・セルビア人連合」のエドモンド・ルキニッチは、クロアチアは内外から存亡の危機にさらされているので、統一国家の形成を急がなければならない、新国家の体制はあとで立憲議会が決定すればよいと述べた。アンジェリノヴィッチ（スタルチェヴィッチ権利党）とトレンッチはそれぞれの提案を説明し、国民会議幹部会の全メンバーがベオグラードに出かけてセルビア政府と統合交渉を行い、合同政府を組閣すべきだと述べた。ただし、彼らはこの合同国家ではいかなる民族の多数者支配を許すべきでないとの考えも示した。社会民主党のクリスティンとブクシェグは、最終的な国家形態は立憲議会が決めることと断った上で、彼らは共和制を支持し、市民が主体となる国家の形成を主張した。続いてスロヴェニアの代表が発言した。ツァンカールは、国家は民主的基盤に基づいて形成される必要があることを強調し、クーコヴェッツとクラマーは、イタリアの侵攻により危機が深まっているので、一刻も早くセルビアとの統合を遂行しなければならないと述べた（Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.124）。

60 *Ibid.*, p.124-125.

61 *Ibid.*, p.125.

62 *Ibid.*, p.125.

63 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, pp.127-128, Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, pp.223-224, Ljubo Boban, *Hrvatske Granice od 1918 do 1991 godine*, Školska Knjiga, Zagreb, 1992, p.14.

64 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, pp.130 によると、反対票を投じた者は2名であり、もうひとり、ドラグティン・フルヴォイ（Dragutin Hrvoj）であった。ただし、フルヴォイは中央委員会の委員ではなかったので投票権はなかった。

65 以上に述べた国民会議代表団の派遣決定の経過は、Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, pp.130-131, Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, pp.216-221, Matković, *Suvremena politička povijest Hrvatske*, pp.67-68, による。

66 757人の議員の構成は、セルビア人578人、クロアチア人は89人、スロヴァキア人62人、ロシア人21人、ドイツ人6人、マジャール人1人であった。

- 67 Krizman, *op. cit.*, pp.214-215, Matković, *op. cit.*, pp.68-69. なおスヴェトザール・ブリビーチェヴィッチは「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」とセルビアとの国家統合を進めるために、ヴォイヴォディナのセルビア人グループの活動を支持した。彼は頻繁にノヴィ・サドのセルビア人グループと連絡をとり、自ら「ザグレブと手を切ってもらいたい」と彼らに勧めたのは有名な逸話になっている。
- 68 Krizman, *op. cit.*, pp.216-221, Matković, *op. cit.*, pp.67-68.
- 69 Matković, *op. cit.*, p.70.
- 70 *Ibid.*
- 71 国家統合セレモニーで述べられたパヴェリッチの請願文は次の通り。

「国王陛下！

解放されたセルビアの首都において、勝利を勝ち取ったセルビア人民軍の大元帥である国王陛下に対し、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国民評議会を代表し、ご挨拶申し上げることはこの上ない幸福を感じます。セルビア軍は、強力なる連合国軍と共闘し、偉大なる国民統合の事業の条件を作ってくれました。旧オーストリア＝ハンガリー帝国に属していたスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人は政治権力を掌握し、国民統合の理想に燃え、すべての民族は自分自身でその運命を決めることを求める民主主義の大原則にのっとり、独立の国民国家を臨時に樹立しました。我々は、すでに10月19日の声明において、セルビアおよびモンテネグロと合体し、南スラヴ人の民族的な居住地域を切れ目なく包含するセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の統一国家を形成したいという意思を述べました。この考えを実現するために、国民評議会は11月24日の総会でスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家をセルビアおよびモンテネグロと統合することを決議し、この決議を国王陛下の前で正式に報告するために代表団を選任しました。

国民評議会の決議は、セルビア人、クロアチア人、セルビア人の統一国家の元首にはペータル国王陛下ないしは国王代行者である摂政殿下が就任すること、同時にセルビア政府ならびに、セルビアおよびモンテネグロのすべての政党の代表と協議を行い、南スラヴ人国家を管轄する統一政府を形成するというものであります。

国王陛下！

国民評議会の要望は次の通りです。過渡的な状況を鑑み、国民評議会とセルビア王国国民の代表との協議に基づいて、臨時の国民代表組織を樹立し、議会政治の原則にしたがって、政府機能を遂行する。この臨時政府は、立憲議会が召集され、新政府が憲法と議会政治の原則で樹立されるまで継続する。同様の理由により、現行の自治的な行政機構は臨時政府の監督の下で業務を継続し、その行政事項についてはそれぞれの自治的代表組織に対しても責任を負う。

我々の考えでは、この経過的な期間の間に統一国家の最終的な組織の諸条件を作り出す必要があります。とりわけ臨時政府は立憲議会を組織する必要があります。国民評議会がまとめた提案では、この立憲議会は、普通・平等の選挙権、直接投票、議席の比例代表制を基礎に議員が選出され、遅くとも講和条約の締結後6ヶ月以内に召集されるものです。

かかる歴史的な時期に、旧オーストリア＝ハンガリー帝国の南スラヴ人の全領域を

代表して国王陛下の前に出たとき、我が国の大きな貴重な領土がイタリア王国軍の部隊によって占領されていることを申し上げなければならないことはまことに遺憾です。イタリアは我々が友好的な関係を保ちたいと考える同盟国です。しかし、民族の原則と自決権の原理の侵害を強制し、国民の一部を外国に譲り渡すことを許すような協定については、いかなるものであれ、その正当性を認める用意は我々にはありません。したがって、我々はロンドン協定の正当性を認める用意はまったくありません。国王陛下にとくにご注意くださいいただきたいことは、イタリアによる占領は、彼らが旧オーストリア＝ハンガリー帝国軍と結んだ休戦協定の諸条件が定める境界線と権限を逸脱していることです。しかも、この領土は、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家が休戦協定締結の前にオーストリア＝ハンガリーからは独立した自国の領土であることを宣言していたものです。この点についてはセルビア王国政府に必要な証拠をお見せするつもりです。しかしながら、我々は完全な信頼感をもって希望を表明します。それは、セルビア王国が、我が国民の意向に沿って、民族的な境界に基づいて、またアメリカ合衆国大統領ウィルソンとすべての同盟国が承認している民族自決権の原則を適用して、確定した国境線が引かれるように断固とした態度で交渉されることです。

ペータル国王陛下万歳

我が国王陛下万歳

セルビア、クロアチア、スロヴェニア全人民万歳

自由なる統一ユーゴスラヴィア万歳」

これに対するアレクサンダルの答礼は次の通り。

「遠来の紳士各位！

スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国民評議会を代表し、また敬愛する広範な国民各層の考えを代表してあなた方が到着したこと、あなた方が国民の考えを伝え、またすべての国民、すべての考え、栄えある祖国の統合を宣言した11月24日の歴史的な決定を伝えられたことは私にとって深い喜びである。

さきの報告を聞いて、私はここに国家元首としての責務を果たすことができると確信した。私の行為は、三つの信仰をもち、三つの名をもち、ドナウ川とサヴァ川の両岸に居住する我が血族の最良の子孫たちが、我が祖父たるアレクサンダル公やミハイロ公の時代に用意し始めたものを最終的に完成させることにすぎない。私は、我が国民の要望および考え方に応え、ペータル国王陛下の名において、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の独立国家の諸地域とセルビアとが統合され、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国が樹立されたことを宣言する。

この偉大なる歴史的宣言は、勇敢に政権を奪取して外国のくびきを断ったあなた方、国民評議会の委員の方々、あなた方のすべての協力者の方々のご尽力に対する最良の報奨となつてほしい。同時にそれは、評議会が代表するところのあらゆる国民各層の高邁な意識とこれまで支払った犠牲に対しても最良の報奨ともなつてほしい。本日の宣言はまた、自由のために倒れた我が国の将兵の墓石に捧げる最も美しい花輪に

なり、私とともに生き残り、同盟国の大きな高尚な助力を得つつ強大な敵国に勝利を勝ち取った彼らの戦友の胸に捧げる優美な花束となつてほしい。勝ち取ったこの栄光の勝利は我が軍の将兵とともに我が軍内のユーゴスラヴィア部隊が分かち合うものである。我が軍はあなた方のもとに駆けつけ、あなた方は同胞を迎えるように彼らを迎えてくれた。我が軍を代表し、この出迎えに私は感謝を申し上げる。あなた方は、セルビア王国およびセルビア国民、ならびに我が父ペータル一世と私に対して絶大な信頼を寄せてくれたが、その情熱に対しても感謝を申し上げる。私は、全権代表としてのあなた方および国民評議会に対して、またあなた方がその願望や考えを代表するところのスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人同胞に対して、次の事柄を確信させることができる。それは、私と我が国の政府は、セルビアおよびセルビア国民を代表するすべての人びととともに、いつ、いかなる場所においても、あらゆる利益に対して、またあなた方がその名において来られたあらゆる崇高なる精神に対して、深い冷静なる同胞愛をもって対処するということである。あなた方が示され、私と我が国政府が完全に同意した要望および考え方に沿って、あなた方が示されたすべての事柄を一刻も早く実現させるため、統一政府はただちに仕事を始める。この政府が仕事をするのは、過渡期の暫定的な時期から立憲議会が召集されその仕事が終わる時期までの期間、ならびにこの議会の選挙および立ち上げの期間の間である。崇高なる父母の先例と教えを守り、私はもっぱら、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の自由な市民に対する国王となる。その際、普通選挙制度に基礎を置く憲法と議会、および広範な民主主義の諸原則に対して、私は常に忠誠を誓う。そのため、統一された祖国を代表する政府の形成にあたってはあなた方の協力を仰ぎたい。この政府は、何よりもあなた方、ならびに国民を代表する人びとと常に密接な関係を保ち、これらの人びとと協働し、これらの人びとに対して責任を負うものである。

これらの人びとおよび国民全体とともに、この政府は最初の課題として、我々の国家の国境が我が国の全国民の民族的な境界に一致するように努力する。あなた方とともに、私は、我々の友人と同盟国が我々の見地を評価してくれることを希望しているし、また希望する権利があると考えている。なぜなら、それは彼ら自身が公言している諸原則に合致しているし、彼らもその諸原則の勝利を勝ち取るために貴重な命をこれだけ費やしてきたからである。私はまた、世界の解放の事業は、栄えあり進歩的で教育のある我が同胞を他国の権力に譲り渡すことによって寸断されることはない和確信している。同時に私は、この見地がイタリア王国自身の決議に表明されることを願っている。なぜなら、イタリアの存在の起源がこの諸原則に負うところが大きく、前世紀の偉大なるイタリアの先人は書物と行為でこの諸原則を解釈してきたからである。あえて言わせていただくならば、この諸原則と伝統を遵守することによって、我々と友好関係および良好な近隣関係を保つことによって、イタリア国民は、ロンドン条約の実現によるよりもはるかに公正な事物と安全保障を見いだすことになるだろう。ロンドン条約は我々が与り知らないところで結ばれ、我々はいずれ承認したことがない条約である。それは、オーストリア＝ハンガリーの崩壊が予見されなかった状況のもとで結ばれたものであり、当時考慮された事柄の多くは無意味になっているものである。

この点において、そしてその他のすべての仕事において、我が国民が最後まで一丸となり強い意志を保つこと、そして新しい生活に晴れ晴れとした誇らしい面々が加わり、偉大なる業績と幸運がもたらされることを私は願う。統治者としての私の言葉ならびに祝辞が自由な統一されたユーゴスラヴィアの敬愛なる同胞に向けて伝えられるように、私は、あなた方、親愛なる諸代表にお願いしたい。

セルビア、クロアチア、スロヴェニア全人民万歳！

セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国に常なる幸運と栄光あれ！」

以上の翻訳に用いたテキストは、Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, pp.133-135, による。

72 Joseph Rothschild, *East Central Europe between the Two World Wars*, University of Washington Press, Seattle and London, 1974, p.205.

73 *Ibid.* その背景について、ロスチャイルドは二つの点を指摘している。一つは、南スラヴ人の政治指導者たちは、自分たちがセルビアと比べ、軍事力や統治能力が不足し、外交面で公認された地位をもっていないことに意気阻喪していたことである。もう一つは、セルビアに普通選挙の伝統があることに期待して、新国家でも南スラヴ人の有権者に十分な保証が与えられるだろうと楽観的な見通しをもっていたことである (*ibid.*)。

74 「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の独立宣言がなされる直前の10月26日、国民評議会の指導部は、ルカ・シュニャリツ將軍とミホヴィヨ・ミハリェヴィッチ將軍に対して、国民評議会がオーストリア＝ハンガリー帝国から独立を宣言した場合に帝国軍は武力で鎮圧しようとするかと尋ねている。二人の將軍はただちにウィーンに赴き、カール皇帝に謁見して意見を求めた。皇帝は將軍たちの任務を解き、以降は国民評議会と協力するように命じた。10月28日の夜、二人はザグレブに戻り、国民評議会の指導部にその指揮に服する旨を伝えた (Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.82)。ここで指摘しておきたい重要な事柄は、旧帝国軍の指揮官が国民評議会に対して恭順の意を明らかにしたことによって、翌日の「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の独立宣言の挙行が可能になったことである。

75 Krizman, *Raspad Austro-Ugarske i stvaranje jugoslavenske države*, pp.245-249. なお旧帝国陸軍側の死者の中にはセルビア人が一人含まれていた。したがって、行進に参加したのはクロアチア人将校と兵士だけでなく、セルビア人兵士も含まれていた。さらに興味深いことは、旧帝国陸軍の兵士の隊列は中心街に向かう途中で、ザグレブに駐留していたセルビア軍兵士の一団と遭遇した。このとき彼らに対して、旧帝国陸軍兵士は「兄弟民族セルビア人万歳」と呼びかけ、これに対して、セルビア軍兵士は「兄弟民族クロアチア人万歳」と応じたという。つまり、このときの旧帝国陸軍の将校や兵士の不満は、セルビアとの国家統合を一方的に決めた国民評議会の指導部に向けられていたのであり、彼らはセルビアやセルビア軍に対してはとくに悪意をもっていなかったということである。

76 Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.139.